

新田つぐみ

映画評論分析

—2010年代日本映画における新しい家族の表象—

要旨

本研究は、2010年代の日本映画作品を通して、血縁関係がない家族は新たな「家族のかたち」として表象しているのかを調べるものである。

現代においては、多様な家族が存在している中で、価値観や社会環境によって時代とともに「家族のかたち」や、家族に対する意識が変化している。家族に対する意識の先行研究では、多くの人が家族であるために精神的な繋がりが重要視されており、血縁や戸籍の法的な繋がりはそれほど重要視されていないことが考えられる。

検討においては、血縁関係のない家族について、2010年代の3つの映像作品を対象に、日常シーンから映し出される人々の関係性や心理的距離の変化から分析を試みた。3作品から、血縁関係がない家族は、血の繋がりがなくとも家族らしさが表れていた。

この結果から、2010年代の日本映画において、血縁関係のない家族は新しい「家族のかたち」として作品で表象されていると結論付けた。血縁関係のない家族は血縁以外の様々な繋がりを通し、家族らしさが描かれていることで「家族のかたち」を形成していることが考えられる。また、映画の中で家族が描かれることによって、血縁関係のない人同士の心理的距離が近づく様子は鮮明であり、核家族だけではないこれまでとは異なる新しい家族像が形成されることがわかった。